西丸震哉さんを偲んで

１９６５年卒、黒田洋一郎

登山、探検家、食生態学者、そして文明批評家の西丸震哉さんが今年（２０１２年）５月２４日、ひっそりと亡くなられた。享年８８。最近ネットで訃報を知ったとたん、ヒト脳で特に発達した連想システムにより、なつかしい西丸さんの記憶、さらにそれに関わる事象が次々にでてきた。もう昔のことを忘れないうちに書き留めたくなる歳になったようだが、書き進めるうちに日本の未来のことになってしまったのは、亡き西丸さんの所為もあるのでお許し願いたい。

１）　奥尾瀬、岩塔と湿原や池塘のこと

私が現役の１９６０年代前半、海外登山はほぼ不可能だったから､｢その代わりに国内で誰も行かない山に行こう｣と思った人は少なくない。その筆頭が西丸さんで「人知れず、別天地のような仙境がひっそり静まっている」所に見当をつけて入り込もうとしていた。そして米軍の航空写真を隅から隅まで眺めて発見したのが、尾瀬ケ原の北方、外田代の西北端あたりにある岩峰状の突出であった。すぐに山行を実行した彼は、昔のマタギ猟師以来おそらく初めて、この岩塔にたどりつき、その周りの湿原を「岩塔ヶ原｣､その北西にある可愛い池塘が５つある湿原を「瞳ヶ原」と名付けた。あの『日本百名山』の深田久弥さんが､｢ヒトミなどという軽薄な地名をつけるやつがいる」と揶揄したという曰くつきの命名である｡岩峰に見えた地形の正体は、「小さな丘の上に針葉樹の大木がビッシリつまってニュウッと立っているもの」と『西丸震哉の日本百山』(！）に書き残している。私が知るお二人はちょっとしたライバルだった。

岩塔のことは、確か尾瀬の先達といえる川崎隆章さん（日本登山学校、山と渓谷社から『岩と雪』を創刊）を介して教えて頂いたと記憶している。当時私はワンゲルを学部３年（！）で無事卒部し、海外に行きたくて創った学術調査探検部で夏合宿の候補地を探していたのだ。未知の土地などない日本で、辛うじて「秘境」といえる所だし、TWV の最後の夏合宿で平ヶ岳—柳平—至仏山のコース（平ヶ岳沢隊、和田芳武リーダー）は歩いている。西丸さんは「誰も行かない所へ初めて行く」のが目的なので、この付近の詳しいことは調査してなかった。そこで､湿原や池塘の簡易測量､植生や昆虫の調査、湿原泥炭層のボーリング調査など、学生でも出来そうな「学術調査」を行うことにした。

１９６６年、梅雨明け１０日の晴天のなか、総勢１１名（うち女性２名）はテントと１１日分の食糧を背負い猫又川を遡行しはじめた。初めは順調で、驚いて跳ねたイワナを手づかみにし、夕食のおかずとした。源流近くになると大岩が行く手を塞ぎ、重荷でバランスをくずしそうになり大苦闘となった。それでも右の小沢に入り、スズ竹の薮を漕いでいると、ひょっこり広い湿原に飛び出した。見渡す限り人の足跡が残っていないような太古のままの緑のしとねで、皆苦労が報いられ大満足。少し先の、乾燥地で水が脇をながれている絶好のサイトをみつけ、TUSEC ヶ原と名付けベースキャンプとした。そこから毎日、主な湿原と池塘に調査隊を出した。岩塔も私が詳しく調査したので報告書を末尾に引用する。大白沢山の向こうにある大白沢の池に測量のための６人乗りゴムボートを担ぎ上げ、担ぎおろすのはことに大変だった。「キョエー」と奇声をあげながら攻めてくる竹薮と戦い、担ぎにくい大荷物をボヤキながら運び上げた九州男児は、現在日本国の財務大臣である。

もう一つの大きな目標は、航空測量でつくるように変わった新しい５万分の１の地図で、松くら（山の下に品）高山から北へのびる尾根の西麓に初めて表記された無名池（白沢ノ池）に行くことだった。池をめざして晴天の朝３時、足のそろった特別隊が出発したが、景鶴山手前の竹薮で一人が撥ねた竹で右目を痛めてしまった。なんとか東電小屋まで下ったら、幸運にも丁度ヘリコプターが来ていた。事情を話すと快く、鳩待峠経由で沼田まで搬送してくれること

になった。生まれて初めてヘリに乗って、尾瀬ヶ原を空から眺める幸運をつかんだのだが、失明が心配で写真どころでなかった。ただ一面の湿原に池塘が散らばる真上からの俯瞰はまさに一枚の絵のように、今でも私の脳に刻み込まれている。

事故者の右目は結局後遺症もなく直ったが、無名池行きは失敗した。悔しいので約２週間後、別の部員２名とともに景鶴山経由の強行往復を試みた。竹藪だけでなく、やせ尾根でのシャクナゲ等の密生に阻まれ１時間かけて５００ｍも進まない。夕方近くようやく尾根を下り、ブナ林と針葉樹の小尾根に囲まれた、思っていたより大きな池に到達。写真撮影と簡単な測量を行い尾根に引き返す。少し戻った所で、覚悟していたように真っ暗になりビバーク決定。でも地元の山小屋の主人、星信夫氏についで２番目に池に到達、この後１０月に訪れた川崎さんらによって「幻の大池」（現在の地図では、白沢の池）と呼ばれるようになった。

この秋の駒場祭では探検部として調査結果を展示、報告書『奥尾瀬の湿原と池塘を訪ねて』を印刷発行した。西丸さんは見に来てくださったようだが、行き違いでお会いできなかったと記憶している。この後、この地域は自然保護のため厳重な立ち入り禁止区域となり、積雪期には良いらしいが肝心の無雪期には行けなくなってしまった。「夏がくれば思い出す、はるかな奥尾瀬、遠い昔」、貴重な素晴らしい体験だった。

ともかく西丸さん、良い所を知らせていただき、ありがとう。

２）　お化け、幽霊のこと

西丸さんは農水省食料研究所に勤めながら自由に国内外の“探検”調査を行っていた。１９６４年海外旅行が解禁になると、台湾、パプアニューギニア、アマゾン、インド、アラスカなどを学術調査し、食を通して人間を眺める「食生態学」を確立し有名になった。ところが西丸さんは科学者でありながら、お化けや幽霊を「実際に見た、存在する」と主張することでも有名だった。彼は鮮明な幻覚を見る特殊な脳を持っていたと思われる。母方の祖父の弟が島崎藤村、２人の兄、西丸四方と島崎敏樹は精神科医で、彼は音楽や絵画に優れていたばかりでなく、SF小説まで書き多才であった。

西丸さんの十八番は「岩塔ヶ原でテントを張っていると、大白沢山から一人の登山者が下りてきてテントの脇を通り過ぎて行ったが挨拶もせず、なにか変な男と思って追いかけたが、突然消えてしまった。幽霊を見たのだ」というもので、さらに『山とお化けと自然界』では「２５年後その幽霊に会いたくてまた岩塔ヶ原にテントを張ると同じ男が現われた。今度は前に立ちふさがり、その男の顔を見ると何と２５年前の私だった」と話はドッペルゲンガー（自分の分身を自分が見る）にまで発展している。ドッペルゲンガーは、自分が好きな思い入れのある場所に出ると言うから、岩塔ヶ原は西丸さんにとって特別の場所だったのかもしれない。

日本山岳会の二火会に講師で来た時も、まじめに岩塔ヶ原の幽霊の話をされたので、質問時間に「脳の高次機能の研究をしていて、岩塔ヶ原近くでテントを張ったこともあるので大変興味がある。一緒にいた人も確かに同じ幽霊を見たのですか？」とお聞きすると、全く別の話題に話をそらされた。西丸さんとは、結局一度も個人的にお話したことがなかったので、終わったら早速捕まえて飲みに行こうと思っていた。ところが終わったとたん、旧知の若松林治さん（『インドネシアの山登り』の著者）だったと思うが、隣の人に一寸話しかけられ視線をはずした後、すぐ西丸さんを探すともう居ない。廊下から玄関の外まで行ったが姿はなかった。まるで幽霊のように消えてしまった。

あとで考えると、脳を研究していると言ったのが拙かったようだ。彼は私をコチコチの科学至上主義者と誤解され、「こんなバカは相手にしない」と逃げられたのであろう。前掲『山とお化けと自然界』には「幽霊の仮説」の項などで、「現在までの科学でわからないことは、いくらでもあり、後になってから、実はそういうことだったのかと分かることが多い」とポッパー（著名な科学哲学者）的な見解を述べ、「それを無視

する方が、よほど非科学的というべきであろう」と正論を述べている。放射線医学の現状を知ると、原発事故後の放射線による健康被害を考えるとき重要な視点と思われる。

ともかく西丸さん、もうすぐ私もあの世に行くので、今度は逃げないで話をしてください。

３)「４１歳寿命説」について

場所にもよるが１９８０年頃までは、いわゆる「世界の秘境」と言われる所に行くと、現代の工業化された社会とは全く異なる「古き良き世界」がそのまま残っていた。西丸さんは好んでそのような地域を訪れ、著書で現地の事情だけでなく、そこからの視点で日本など“先進国”の文明を強く批判された。日本で、人工化学物質で汚染された食べ物が平気で「安全だ」として流通し、大気汚染など公害が問題になってくると、彼は発言を封じられ勝ちな国家公務員を１９８０年に辞職し、『４１歳寿命説、死神が快楽社会を抱きしめ出した』というセンセーショナルな本を１９９０年に出し、話題になった。１９５９年を日本での汚染と飽食の始まりとし、これ以降に生まれた人だけの社会では平均寿命が４１歳になるという統計予測をもとに警鐘を鳴らしたのだ。最近まで日本人の平均寿命は長くなっていたが、ここ２年少し短くなった。西丸さんは２００８年、遺言のような『壊れゆく日本へ』を出され、マスコミが余り報じない日本人の持つ様々な健康リスクを挙げ「自然からの報復」「狂った食」「崩壊の予兆」「末世の処し方」と、最後まで危機を訴え続けられた。

私が加えると、一番困るのは「子どもが生まれず、まともに育たなくなること」。現在問題になっている環境ホルモンに代表される化学物質は、生殖毒性、神経毒性、免疫毒性をもっていて不妊、性同一障害、草食系男子(雄脳の雌化)、発達障害、行動異常、引きこもる、切れ易い若者、アレルギー、アトピー、化学物質過敏症などの原因と疑われている。たとえば生殖毒性による精子の減少や劣化、卵子の発達異常が原因の「気が付かれない流産」などは不妊を増加させ、少子化を引き起こしているようだ(堤治『環境生殖学入門』、森千里『胎児の複合汚染』など参照)。自閉症、ADHD など発達障害の日米での増加も、農薬など環境化学物質が原因であることを示す論文が、米国で続々でてきている。

ともかく西丸さん、不屈の奮闘、ご苦労さま。善いことをした人は天国に行ける、悪いことをした人は地獄に堕ちると、私は科学的根拠なしに信じています。　　合掌

岩塔の調査記録　　黒田洋一郎

大白沢山の稜線から見るとカッパ山の右下の樹海の中にポッコリと突き出た小さなピークがある。一寸みると岩の塔のようなので岩塔と名がついたらしいが、現地にいってみると、急な馬の背状の地形にビッシリと針葉樹がはえているのである。樹種はオオシラビソ、ネズコ、コメツガ、クロマツなどで、下ばえはほとんどなく、シャクナゲとゼンマイ、コケなどがわずかにあり、針葉樹の落葉が深々とつもっている。東側の斜面はあまり針葉樹がなく、上部は灌木、下部はササ原にオオシラビソがはえている。盆地状の地形から北に向って小さな沢がはいっており、この小沢はミズバショウの群落で終わって岩塔横の湿原に消えている。西斜面は急で針葉樹がはえ、下ばえはほとんどなく直接大白沢山からくる沢へ落ちている。稜線部に密生する針葉樹は樹高約２０m、最大のクロマツの胴まわりは約３mもあった。成因を想像してみると、カッパ山のマイナーピークが出来る以前のヤセ尾根がカッパ山からの噴出物や湿原の発達でまわりを埋められ、上部のみ残ったのではないかと考えられる。針葉樹の大きさ、種類(ネズコ、松などは他には余り見られない)も、この地点のみ古い状態が保たれていることを示している。岩塔は湿原面から頂上まで高さ約１５m位あり、北北東から南南西に細長い。よく調べなかったがもっと小規模な尖塔状の地形が外田代南端にも見られた。

東京大学学術調査探検部:『奥尾瀬の湿原と池塘を訪ねて』(１９６６)より